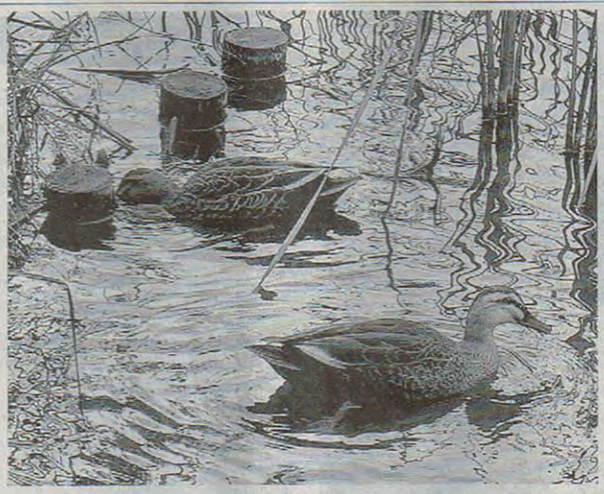
浅場効果 水鳥間近に

井の頭池

水生植物根づき集まる

井の頭公園（三鷹市、武蔵野市）の井の頭池で、池の水を抜く「かいぼり」を実施した際に整備した浅場に水生植物が根づき、今冬、餌を求めるカルガモなどの水鳥が多く集まるようになった。同園で野鳥の調査などを行う認定NPO法人「生態工房」（武蔵野市）は「浅場の効果により水鳥が間近で観察できるようになった。ぜひ池に足を運んでみて」と呼びかけている。



㊤井の頭池の浅場で餌を探すカルガモ（15日午前）㊦井の頭池で浅場を整備するボランティアら（2018年3月17日）＝生態工房提供

15日朝。井の頭池の浅場では、カルガモが逆立ちして水底にくちばしを付け、餌を探す様子が頻繁に見られた。浅場は護岸に近いため、池の脇の園路からよく観察できる。黒い体に白いくちばしと額が特徴のオオバンの姿もあった。

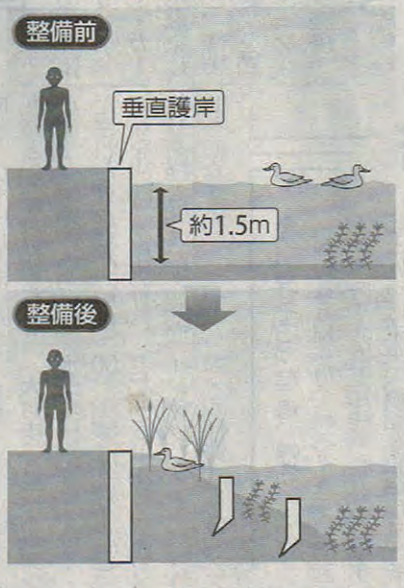
井の頭池を巡っては、都が外来種駆除と水質改善を目的に、2013年度、15年度、17年度と3回のかいぼりを実施。昨年2～3月には、岸辺からすぐ約1・5㍍の水深となる垂直護岸に囲まれた同池で、浅場5か所（水深0～30㌢ほど）を整備した。都西部公園緑地事務所によると、浅場の長さは池の水際線の9%に当たる計185㍍。かいぼり前の約2倍となった。

浅場の整備には、ボランティア約300人も参加。杭を段階的に打って砂を流し込むなどし、かいぼり以降に池で生えてきたヒメガマ、池底の泥の中にあった種子から育てたカンガレイやサンカクイなどの水生植物を植え付けた。

その結果、昨春頃には水生植物が根づき、水鳥の餌にもなるエビ類や小魚のすみかになった。さらに今冬、新芽や種を求めるカルガモやオオバンなどの水鳥も多く現れるように。水辺を歩くコサギも確認された。

水生植物は、根は水底に固着するが葉や茎の一部が水面から出ている「抽水植物」、全体が水中にあって水底に固着している「沈水植物」などに分類され、浅場があるとより多様な種類が観察できるという。同法人の佐藤方博さん（45）は「かいぼりで外来種駆除などは進んだので、今度は『池の自然豊かな環境をよみがえらせる』段階に入った。そのために浅場作りは重要で、今後も増やしていきたい」と話している。

◇

浅場の効果をはじめ、在来種の増加など、かいぼりの成果報告会が今月27日午後1時20分～4時半、三鷹市公会堂で開かれる。参加無料。申し込み不要。問い合わせは生態工房（0422・27・5634）まで。

井の頭池で整備された浅場のイメージ